琉球大学学術リポジトリ

琉球官話課本における語彙の分類方法－『琉球官話集』「五字官話」を例に

メタデータ	言語:
	出版者: 琉球大学法文学部
	公開日: 2013-05-09
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 金城, ひろみ, Kinjo, Hiromi
	メールアドレス:
	所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/26038

琉球官話課本における語彙の分類方法
—『琉球官話集』「五字官話」を例に

金　城　ひろみ

一、　はじめに

『琉球官話集』は、琉球官話課本の中でも、語彙分類集に属し、その語彙の配列は独特であると言える。琉球官話課本の中で、語彙分類集に属される課本で、『琉球官話集』以外では、『廣應官話』が挙げられる。『廣應官話』の語彙の分類方法は比較的わかりやすく、「飲食」・「身體」等、語彙の種類により分類されている。一方、『琉球官話集』の語彙の分類方法は、『廣應官話』の分類方法と異なり、「食物」・「身體」等の語彙の種類により分類されている部門と、「二字官話」・「三字官話」・「四字官話」・「五字官話」等の語彙の音節数のみに焦点を当て、語彙の意味には捉われず、あらゆる種類の語彙が音節数で分類されている部門がある。また、当時、琉球が中国と交流していた様子がうかがえる、琉球の地名や景勝地を収録している部門や、朝貢の際に関係が深かった北京でのやりとりのための「北京俗語」が、一つの独立した項目として取り上げられている部門もある。

このように、琉球官話課本であり、また語彙分類集という同種の課本でありながらも、分類方法や収録されている語彙の内容には大きな差異が見受けられる。

本論文では、主に『琉球官話集』の「五字官話」に焦点をあて、語彙の配列や分類方法に関して、新たな角度から分析・考察していきたい。

二、『琉球官話集』における語彙の分類方法

本稿は、『宮良當壮全集10琉球官話集』をもとに分析を進めたもので、本稿では主に語彙分類に焦点を当て、論を展開していくため、『宮良當壮全集10琉球官話集』で示されている語彙数をもとに語彙分類表を作成した。

	頁数	項目	語彙数
1	1-2	称呼類	41
2	2-3	内外親族称呼之類	46
3	3-5	向人回答類	57
4	5	人物死後称呼之言	12
5	6	応答人物死後之類	28
6	7-12	身体之類	208
7	12-18	食物之類	241
8	19-70	二字官話	2244
9	71-94	三字官話	783
10	95-116	四字官話	457
11	117-123	五字官話	174
12	124-125	北京俗話	63
13	126	琉球国三十六島	4（行）
14	127-128	地図	41
15	129	唐栄八景	8
16	129	本国俗並漢字呼	6
17	129-130	冠船冊封座々処々名記	10

上に示した表からもわかるように、語彙分類集である『琉球官話集』における語彙の収録数は多く、またその内容は多岐にわたっている。琉球官話課本の、他の語彙分類集（『廣應官話』）とは収録内容が大きく異なっており、『琉球官話集』では、前半部分は語彙の内容により分類しているが、収録されている語彙の半分以上は、「～字官話」という形式で、音節数により分類されている。そのため、語彙の音節数は同一だが、語彙の意味内容から考えた場合、何ら関

係のない語彙が隣り合わせにまとめられていることがほとんどである。

そのほか、一つの独立した項目の中に、「北京俗語」がある点を鑑みると、琉球王国時代に、中国との交流を行う上で、重要な場所であった北京の言葉である「北京俗語」を学ぶ必要性があったことがうかがえる。また「琉球国三十六島」という項目では、当時の琉球の島々の名称を整理することで、実際に琉球から中国へ渡った者たちが、琉球について官話で紹介する際に、これらは役立つ資料だとわかる。さらに、地図という項目が設けられている点から、『琉球官話集』以前の琉球官話課本には、独立した地図という項目がなかったため、『琉球官話集』が編纂された時期からは、琉球の地図も精巧に作成され始めていたことも明らかである。

三、「五字官話」について

「五字官話」という項目には、174語の語彙が収録されている。『琉球官話集』における「～字官話」という項目は、ほかに「二字官話」・「三字官話」・「四字官話」と分類されており、「～字官話」の中では「五字官話」の音節数が最大の項目だと言える。実際、「五字官話」に収録されている語彙をみると、「五字」以外の語彙も数多く収録されている。『琉球官話集』の語彙の項目にはない、「六字」・「七字」の語彙も「五字官話」の部分に組み込まれているが、すでに独立した項目として設置されている「二字」・「三字」・「四字」の音節で構成された語彙もこの「五字官話」に混在しており、その数は少なくない。

「五字官話」の項目内に収録されている各音節数の語彙数は以下の通りである。

「五字」（五音節）…51語

「四字」（四音節）…34語

「三字」（三音節）…73語

「二字」（二音節）…11語

「六字」（六音節）…1語

「七字」（七音節）…4語

「五字官話」に収録されているこれらの語彙を文法構造から分析し、どのような特徴があるのか考察する。主に、「主述構造」（主語－述語関係）、「動賓構造」（動詞－目的語構造）、「偏正構造」（修飾－被修飾関係）、「並列構造」（並列関係）、「動補構造」（動詞－補語関係）の構造をもとに分類し、これらに当てはまらない場合、その他としてそれぞれを例に挙げることとする。

(一)「五字」（五音節）から成る語（51語）

1、主述構造（25語）

例）大家都歡喜。（「大家」は主語、「都」は副詞で動詞「歡喜」にかかり、述語となる。）

這個花乾焦。（「這個花乾」は主語、「焦」は述語となる。）

惡事傳千里。（「惡事」は主語、「傳」は動詞、「千里」はその目的語となり、全体として述語となる。）

兩個在那裡。（「兩個」は主語、「在」は動詞、「那裡」はその目的語となり、全体として述語となる。）

2、動賓構造（20語）

例）不信我的話。（「不信」は否定詞＋動詞、「我的話」は目的語（賓語）となる。）

沒有東西了。（「沒有」は動詞、「東西」は目的語（賓語）、「了」は助詞となる。）

拜見大和尚。（「拜見」は動詞、「大和尚」は目的語（賓語）となる。）

要求幾個字。（「要求」は動詞、「幾個字」は目的語（賓語）となる。）

3、偏正構造（4語）

例）有閑的時候。（「有閑」が「的時候」を修飾する偏正関係にある。）

十二分顔色。（「十二分」が「顔色」を修飾する偏正関係にある。）

4、介詞＋人＋動詞　　（1語）

例）替你吃玩玩。（「替」が介詞、「你」が人を表し、「吃玩玩」が動詞句になる。）

5、介詞＋人＋名詞　　（1語）

例）同君一夜話。（「同」が介詞、「君」が人を表し、「一夜話」が名詞となる。）

(二)「二字」（二音節）から成る語（11語）

1、偏正構造（8語）

例）棉襖。（名詞「棉」が名詞「襖」を修飾する偏正関係にある。）

鮪魚。（名詞「鮪」が名詞「魚」を修飾する偏正関係にある。）

2、並列構造（1語）

例）蜜蜂。（名詞である「蜜」・「蜂」ともに類義語であり、意味上から並列関係になる。）

3、動補構造（1語）

例）站下。（動詞「站」に補語「下」の動補関係にある。）

4、動賓構造（1語）

例）揀錢。（動詞「揀」に目的語（賓語）「錢」の動賓構造になる。）

(三)「三字」（三音節）から成る語（73語）

1、偏正構造（44語）

例）這幾天。（代名詞「這」が名詞（数詞を含む）「幾天」を修飾する偏正関係にある。）

茉莉花。（名詞「茉莉」が名詞「花」を修飾する偏正関係にある。）

油札糕。（名詞「油札」が名詞「糕」を修飾する偏正関係にある。）

團團坐。（副詞「團團」が動詞「坐」を修飾する偏正関係にある。）

2、動賓構造（13語）

例）動地方。（動詞「動」、その目的語（賓語）の「地方」で動賓関係にある。）

吃點心。（動詞「吃」に対し、名詞「點心」が目的語（賓語）になる動賓関係にある。）

沒體面。（動詞（否定）「沒」に対して、目的語（賓語）が「體面」となる動賓関係にある。）

3、動補構造（9語）

例）賣不成。（動詞「賣」、補語「不成」の動補関係にある。）

想不著。（動詞「想」、補語「不著」の動補関係にある。）

4、主述構造（3語）

例）天曉了。（主語「天」、述語「曉了」の主述関係にある。）

5、否定詞＋動詞（3語）

例）不會說。（否定詞「不會」に動詞「說」が付加された構成になっている。）

6、重ね型（1語）

例）勾不勾。（動詞「勾」の肯定型と否定型との重ね型になっている。現代中国語においては、多用される用法だが、この「五字官話」の部分に収録されている動詞重ね型はほとんどない。）

(四)「四字」（四音節）から成る語（34語）

1、主述構造（14語）

例）日頭出了。（「日頭」が主語、「出了」が述語の主述関係にある。）

月亮上了。（「月亮」が主語、「上了」が述語の主述関係にある。）

南風來了。（「南風」が主語、「來了」が述語の主述関係にある。）

今日也冷。（「今日」が主語、「也」副詞で形容詞「冷」にかかり、全体として主述関係にある。）

2、動賓構造（8語）

例）快些撈飯。（「撈」は動詞、「飯」は目的語（賓語）、「快些」は副詞で後ろの「撈飯」を修飾する。全体としては、動賓関係にある。）

不要惱他。（「不要惱」は、否定詞＋動詞で、「他」が目的語（賓語）となる。全体としては、動賓関係にある。）

3、偏正構造（10語）

例）一陣大雨。（「一陣」は副詞で名詞「大雨」にかかる偏正関係にある。ま

た、副詞「一陣」と形容詞「大」が名詞「雨」にかかる偏正関係ということもできる。）

好大北風。（「好大」は副詞の「好」が形容詞「大」を修飾しており、その「好大」がまた名詞「北風」を修飾しているという偏正関係にある。さらに細かく分けるのであれば、名詞「北風」も名詞「北」と名詞「風」に分解することができ、この関係もまた修飾・被修飾の関係にあることから、偏正関係にあると言える。）

4、把＋名詞＋動詞（1語）

例）把獅子打。（介詞「把」と動詞「打」の間に、その目的関係にある名詞「獅子」をおくことで処置文を構成することができる。）

5、その他　（1語）

例）等亮了去。

(五)「六字」（六音節）から成る語（1語）

1、主述構造（1語）

例）甘蔗替我剝皮。（主語「甘蔗」に、介詞「替」、その対象「我」が入り、動詞「剝」とその目的語（賓語）である「皮」が述語となり、主述関係を構成する。）

(六)「七字」（七音節）から成る語（4語）

1、動詞＋目的語＋量詞（1語）

例）滿懷怒氣三千丈。（動詞「懷」は副詞「滿」によって修飾され、その目的語として「怒氣三千丈」が名詞＋量詞の形で構成す

る。）

2、主語＋動詞＋目的語（3語）

例）天不生無祿之人。（主語「天」、動詞（否定詞＋動詞）「不生」、目的語（賓語）「無祿之人」となり、中国語の基本文型であるSVOの形に対応している。）

地不載無根之人。（主語「地」、動詞（否定詞＋動詞）「不載」、目的語（賓語）「無根之人」となり、中国語の基本文型であるSVOの形に対応している。）

五、おわりに

琉球官話課本の中でも、語彙分類集は今のところ2種のみの存在が知られている。その一冊である『琉球官話集』は、編者、編纂年も未詳であり、それ以前に編纂されたといわれている他の琉球官話課本（『白姓官話』、『官話問答便語』、『学官話』、『廣應官話』等）を参考にし、頻出している語彙を中心に語彙を選定し、そのほか、琉球の地名や役職名、地図等を盛り込み、北京で必要と思われる北京独特の表現や方言を取り入れて、編纂された琉球官話課本であるとわかる。また他の琉球官話課本を参考にしている点などから、『琉球官話集』の編纂時期は、琉球官話課本の中でも遅めの清末になることが推測できる。

『琉球官話集』は、語彙分類集としての内容構成は、大きく分けて3分類できるといえる。親族名称、身体に関する名称、食物に関する名称など、語彙の内容により整理されている部分、また「～字官話」という語彙の音節数により整理されている部分、最後に、琉球が中国と朝貢関係にある中で必要と思われた、琉球に関する諸知識（琉球の地図、地名、景観に関わる記載等）や、琉球

にとって重要な地として知られる北京の現地での表現（「北京俗語」）を取り込んでいる部分の3分類が、『琉球官話集』の語彙分類の大きな枠組みといえる。

本稿では、『琉球官話集』の語彙分類の中でも、これまであまり焦点の当てられていない「五字官話」に的を絞り、「五字官話」で取り上げられている語彙の文法構造を中心に考察した。

まず、「五字官話」の特徴の一つとして、『琉球官話集』内の他の項目と異なり、「五字（五音節）」以外の音節数の語彙が数多く混在しているという点が挙げられる。『琉球官話集』の項目の中でも数の多い「二字官話」や「三字官話」においては、他の音節数の語彙が同時に収録されていることはない。例えば、前半部分の「身體之類」や「食物之類」に挙げられている語彙が「二字官話」や「三字官話」に重複して収録されていることはいくつか見受けられるが、異なる音節数の語彙は見受けられない。しかしながら、「四字官話」や「五字官話」になると、その音節数以外の語彙が混在しはじめてくる。特に、「五字官話」に至っては、音節数が、二字から七字まで全ての音節数の語彙が混在している。また語彙の配列も特段きまりがあるようには見えず、「五字（五音節）」の語彙から始まるこの項目は、中盤で「四字（四音節）」、「三字（三音節）」、「二字（二音節）」が混在し、終盤で「六字（六音節）」、「七字（七音節）」の語彙（語句）が収録されている。その配列は、『琉球官話集』を編纂する際に、他の項目で抜け落ちた語彙も同時に収録しているということがうかがえる。

「五字官話」の部分は、「二字」や「三字」などと異なり、五字で一つの文として成り立つ表現が多い。そのため、「五字」の部分は、文法構造から考察すると、「主述構造」が最も多くを占めている。また、現代中国語でも多くみられる点であるが、動詞－目的語の関係である「動賓構造」が頻出している。これは現代における中国語テキストに収録されている語彙においても、最も多

い文法構造であり、中国語独特の表現である動詞と目的語の組み合わせであるコロケーションを学習する上で、必須の文法項目である。また、「五字」の部分以外でも比較的多く見受けられる構造は、「偏正構造」である。これは、修飾・被修飾の関係であれば、どのような語彙でも成立する構造であるが、「二字」や「三字」、「四字」という音節数が少ない語彙の場合により多くみられることがわかる。それに対し、「六字」や「七字」という音節数が多い場合、ほとんどが一文の形になることが多い。また、主語－動詞－目的語のような形だけではなく、その要素に量詞や介詞などという他の成分も組み込まれて表現されていることが少なくない。介詞を用いた表現は、どの音節数にも使われており、他の項目である「三字官話」や「四字官話」の部分においても、介詞と代名詞や処置文を構成する「把」と名詞（目的語）を組み合わせにした表現は頻出されている。また、否定詞を伴う表現は他の項目でも見受けられたが、この「五字官話」においても多用されている。「五字」の部分のみならず、「七字」部分の対句の表現においても、否定詞を伴い、対比するような形で表現をしている。

語彙の文法構造の特徴以外に、「五字官話」部分の内容構成についてもいくつか特徴が見られる。「二字」、「三字」、「四字」などのようにすでに独立した項目がある語彙でも、編纂時に見落としや、後に追加した部分もあり、それらの項目では挙げられていなかった語彙が重複せずにこの「五字官話」で新出する語彙が多くみられた。これは、「二字官話」等で同一項目内において、「前出」というような重複して収録されている語彙が少なくない一方で、「五字官話」で取り上げられる「二字」等の語彙が重複されていないのは、より細かな選定が行われたと考えられる。

さらに、「五字官話」でみられる特徴として、音節数が多い語彙が収録されている関係上、語彙を配列する際に、「対句関係」を考慮して収録していたとうかがえる。これは、特に他項目である「四字官話」でもみられる現象だが、

「五字」、「六字」、「七字」と音節数が増えるにしたがい、「対句」表現を課本に取り組む傾向がある。もともと中国文化において、「対聯」などを貼る習慣からもわかるように、「対」という概念は重要視されていることから、言語においても、「対」の表現は格式高いとされている。このような表現上の習慣においても、琉球官話課本では、琉球が中国との交流の上で必須である中国文化を取り入れ、表現方法も採用していることがわかる。挨拶表現だけではなく、格言や慣用句など、当時の琉球の人々が官話を学ぶ際に、あらゆるレベルの学習者にも対応できるよう、比較的容易な語彙から、難易度の高い語彙まで選定し、収録していることが明らかである。この「対句」部分にも、その難易度の差異を取り入れた配慮がわかる。

本稿では、『琉球官話集』の中でも、項目内の語彙が煩雑だと思われる「五字官話」に焦点を当て、考察を行ったが、他の項目と異なり、「五字」のみの特徴だけではなく、さまざまな要素を含んだ項目だということがわかった。同課本内の「二字官話」や「三字官話」のように、他の要素をあまり含まずに、「二字」と「三字」の語彙の特徴が色濃く出ている項目に比べ、「五字官話」は「五字」のみにみられる大きな差異はなかったが、他の音節数の語彙と混在することで、「四字」以上の多音節による語彙の特徴や、「対句」表現の増加、慣用表現の採用などを確認することができた。「対句」表現には、必ず音韻との密接な関わりがあるが、この「五字官話」における「対句」表現でも、音韻に関する特徴が見られた。本稿では、その点に関してはあまり触れていないので、今後、他の項目における音韻分析の考察をする際に、同時に分析していきたい。「五字官話」の項目を考察することで、他の項目をより深く掘り下げる必要性を感じると同時に、『琉球官話集』全体の語彙の内容構成や音韻構造についても、再考が必須であり、これらを今後の課題としたい。

六、主な参考文献

・『宮良當壮全集　第10巻　琉球官話集』、第一書房、1981年
・沈国威、『近代中日词汇交流研究—汉字新词的创制、容受于共享』、中華書局、2010年
・松岡榮志・古川裕監訳、『現代中国語総説』、北京大学中国語言文学系現代漢語教研室、2008年
・鲁宝元、『日本汉语教育史研究–江戸时代唐话五种』、外语教学与研究出版社、2009年
・瀬戸口律子、『琉球官話課本の研究』、榕樹書林、2011年
・瀬戸口律子、『官話問答便語全訳—琉球官話課本研究』、榕樹書林、2005年
・瀬戸口律子、『学官話全訳—琉球官話課本研究』、榕樹書林、2003年
・遠藤光暁・朴在淵・竹越美奈子、『清代民國漢語研究』、學古房、2011年
・兼本敏、「「琉球官話の資料集成」における”了”に関する考察」、『沖縄国際大学日本語日本文化研究』12（2）、2008年
・張全真、「《白姓官話》的語言(朝鮮王朝與琉球王国漢語教科書研究）」、松山大学総合研究所所報（62）、2009年
・張全真、「《官話問答便語》《学官話》《廣應官話》《白姓官話》四種琉球漢語課本中的注音字考(朝鮮王朝與琉球王国漢語教科書研究）」、松山大学総合研究所所報（62）、2009年